

精神分析と神秘主義の交錯 —ラカン派を中心とした研究動向—

林 蓮太郎*

はじめに

19 世紀末にヒステリーと神経症の臨床を通じて生まれた精神分析は、無意識や性的欲動を公準とする独特な人間理解を打ち出すことで、20 世紀の思想全般にきわめて大きな影響を与えた。この思想運動が、精神療法の枠を超えて独立した学知を築く過程で、宗教ときわめて複雑かつ両義的な関係を結んだことはよく知られているだろう。フロイトはユダヤ教を深いところでアイデンティティとしながらも、自身の創始した精神分析がいずれ宗教を克服することを予言していた。

しかし、エビデンスが重要視される今日、精神分析の意義は臨床と人文知の両面において厳しく問いに付されている。こうした現況に鑑みた上で、宗教に対する批判的な科学としての精神分析のあり方について、宗教学は再考する必要があるのではないか。

このような問題意識のもと、本稿では精神分析家ジャック・ラカン(Jacques-Marie-Émile, Lacan, 1901-1981)に焦点を定める。ラカンは今日フランス現代思想と呼ばれる知的潮流の中で活躍し、フロイト以後の精神分析のあり方を全面的に刷新した特異な分析家である。精神分析の絶対的な価値を追求した彼の理論と実践は、そのラディカルさから IPA (国際精神分析協会) に唯一属さない「ラカン派」という固有の領野を形成した。

ここで重要なのは、ラカンが自身の精神分析を基礎付けるにあたって、しばしばキリスト教の神秘主義を参照したという点である。実際に彼の著作や講義録であるセミナーを繙けば、神秘家たちの名前を多く見つけることができる。誰よりも精神分析の純粋性を強調した彼の理論からは、精神分析と神秘主義、さらには宗教の関係について興味深い議論を導くことができるはずである。

以下本稿では、先行研究を概観するかたちで、ラカンの精神分析と神秘主義の交錯のうちに広がる研究の地平を見渡すことを試みる。宗教研究において扱われる機会の少ないラカン派の動向についても簡潔に紹介しつつ、そこに潜んでいる豊かな可能性について一定の展望を示したい。なお筆者の知見の限界から、参照される外国語文献は英仏語のものに限られており、また網羅的ではないという課題点はあらかじめ指摘しておく。

第 1 章 問題の所在

1-1. 「神秘主義」概念の生成と精神分析

最初に近年の神秘主義研究の動向について摘記することで、本稿の問題設定を明らかにしよう。

* 東京大学大学院修士課程

19 世紀後半から 20 世紀中葉にかけての宗教研究において、神秘主義はすべての宗教に遍く存在する要素、いわば「宗教の本質」として注目を集めた。しかし近年、宗教概念批判やポスト・コロニアル思想の隆盛を受け、そうした古典的な理解に対する反省が求められている⁽¹⁾。すなわち、神秘主義に認められていた普遍性は近代「宗教」概念の生成と不可分であって、西欧の学知による発明に過ぎないことが指摘され、あらためて「神秘主義」をめぐる系譜学的な検討が求められているのである⁽²⁾。

このような動向を踏まえて、鶴岡賀雄は神秘主義の概念史を網羅的に整理している⁽³⁾。鶴岡によれば、精神分析を含んだ広義の心理学は、それまでキリスト教神学の枠組みで理解されていた神秘的、超常的な現象を、あらたに症例として解釈していった。この「再発見」は、先に述べた近代的な神秘主義の捉え方に大きく影響していよう。というのも、表面的な差異を超えてあらゆる神秘主義に共通して見出されたのは、言うまでもなく神秘体験であったからだ。

渡辺優の論考⁽⁴⁾は、エクスタシーという体験に焦点を当てることで、同様の点についてより具体的に議論を行っている。渡辺が指摘するのは、精神分析、およびこれを育む培地となった力動精神医学の心理主義的な傾向が、本来さまざまな側面を持つ神秘主義をその体験に還元し、さらには治療されるべき病と見なしてしまうという問題点である。

神秘主義について精神病理学的な見方を確立した人物としては、近代神経学の祖として知られるジャン＝マルタン・シャルコーが挙げられる⁽⁵⁾。彼が率いたサルペトリエール学派の宗教研究については、田中浩喜による批判的検討がある⁽⁶⁾。当時抑圧された性的衝動の発露と考えられていたヒステリーと神秘家たちの体験を結びつけたこの学派の研究は、19 世紀フランスにおける共和派と教権派の対立を背景とした宗教的世界観への攻撃という意味合いを帯びていた。彼らによる神秘主義の再発見がフロイトにも大きな影響を与えたことは、力動精神医学史を描いたアンリ・エレンベルガーの古典的な研究⁽⁷⁾が教えるとおりである。

これらの先行研究が明らかにするのは、精神分析が歴史的に神秘主義を、特にその体験に注目することで症状として扱い、分析の対象としてきたということだ。まずはこれが本稿の出発点となる認識である。

1-2. 精神分析との相同性

一方で、精神分析と神秘主義の関係について別様の可能性をラカンのうちに探ることの意義が、近年の研究動向から明らかになりつつある。ラカンが神秘主義に対する病理学的な診断に対して、次のように正面から批判を加える。

前世紀末、つまりフロイトの時代に企てられていたこと、シャルコー及びその取り巻きのあらゆる種類の実直な人たちが探し求めていたこと、それは神秘主義を性的問題に帰着させることでした。しかし、注意深く見れば、神秘主義はまったくそんなものではありません。⁽⁸⁾

ここでラカンは自身の属する伝統に対して明確に反旗を翻している。後述するように、彼

にとって神秘主義とは一貫して、分析家が努めて参照すべき「真摯なもの」であった⁽⁹⁾。

ラカンの神秘主義論に対して宗教学的にアプローチする時、導きの星となるのは神秘主義研究の大家ミシェル・ド・セルトーである⁽¹⁰⁾。イエズス会士として出立して人文社会諸学を涉猟しながら多様な功績を残した彼は、ラカンが創設した「パリ・フロイト派(*École freudienne de Paris*)」のメンバーであり、彼のセミナーに全期間に渡って出席した数少ない人物であった⁽¹¹⁾。

ここでは、セルトーの神秘主義研究の集大成といえる『神秘のものがたり (*La Fable mystique*)』第一巻⁽¹²⁾の序論に注目したい。「神秘主義の額装(*Quadrature de la mystique*)」と題されたその前半部において、彼は16・17世紀におけるキリスト神秘主義の性格を、これと隣接する四つの領域を提示することで捉えることを試みる。その二つ目に、精神分析が挙げられるのである。

セルトーによれば、神秘主義と精神分析はどちらも過渡期の形象である。前者は中世的なキリスト教世界の崩壊過程、後者は近代市民社会を支える個人主義の崩壊過程に生まれた学知であり、二つのあいだには「奇妙な類似性」があると彼は指摘する⁽¹³⁾。実際に、両者は方法論や多くの語彙を共有する。セルトーの議論からはラカンからの影響を読み取ることができるものの、それは精神分析の諸理論を適用して神秘主義を分析するというものでは決してない。むしろ、ふたつの学知に歴史的布置における相同性を見出すという点にその独自性がある。

セルトーが遺した両者の相同性という視座は、『神秘のものがたり』が未完に終わったこともあって、多くの可能性に開かれたままである⁽¹⁴⁾。ラカンの神秘主義論について理論的な内実を理解するだけでなく、神秘主義との関係に照らして精神分析それ自体を問いなおすことが論点になっているといえよう。

第2章 ラカン派の研究動向

2-1. ラカン研究の現状

ラカンと神秘主義をめぐる先行研究を見る前に、ラカン派の全体的な動向についても簡潔に紹介したい。ラカン自身の略歴については、すでに松本卓也による優れたまとめ⁽¹⁵⁾が存在するため省略する。

ラカンの死後、その研究はまずフランスの分析家たちによって引き継がれた。その中心的な役割を担ったのが、ラカンの娘婿でもあるジャック＝アラン・ミレールである⁽¹⁶⁾。彼はラカンの生前からその著作やセミナーの編集を担い、「フロイトの大義派(*École de la Cause freudienne*)」を立ち上げて正式にその後継者となった。その後ラカン派は分裂を繰り返すこととなったが勢力が衰えることはなく、現在フランスには20を超える組織が存在する。さらにその活動は、各々の組織が国際化するかたちでヨーロッパ諸国はもちろん、ラテン・アメリカ諸国にまで拡大している⁽¹⁷⁾。本邦においても、「現代ラカン派」として彼らの理論的展開は少しずつ紹介されている⁽¹⁸⁾。

またラカンは臨床のみならず、思想、批評的関心から取り上げられることも少なくない。しかし、その代表的な論者であるスラヴォイ・ジジエクとミレールの近年の相互批判に見る

ように⁽¹⁹⁾、分析家と思想家のあいだで、理論の解釈をめぐる溝があることも確かである。ラカンの70年代以降の理論についてはそれまでと比較して研究の蓄積が浅く、未だに多くの論点を残したままだといえる。ラカンの生誕120年・没後40年であった2021年にはこれを記念して、未発表であったこの時期のラカンのテキストが刊行されており⁽²⁰⁾、今後のさらなる読解が期待されるところである。

また、同じく記念として刊行された論集『なぜラカンか(Pourquoi Lacan)』⁽²¹⁾には分析家や哲学者だけでなく多くの芸術家が寄稿しており、ラカン派精神分析の学問外への豊かな広がりを知ることができる。

2-2. ラカン研究における宗教

ラカン研究において宗教の主題が一定の問題領域として確立するのは、研究書の刊行や雑誌の特集が相次いだ2000年代後半とみることができる⁽²²⁾。注目したいのは、これはラカン派精神分析がフランスの精神医療体制における意義をあらためて問われた時期と重なっているという点だ⁽²³⁾。その嚆矢となった「公衆保険法第十八条修正案」、通称「アコイエ修正案」のもたらしたインパクトと分析家たちの抵抗については立木康介による詳細な論考がある⁽²⁴⁾。精神療法を行う者を対象とした国家による一元的な評価、管理を趣旨とするこの法案は、大学から独立した精神分析の育成制度を直撃すると共に、あらためてその治療的な有効性に対する疑義を呈した。さらに、その流れは認知行動療法の推進者たちによる『精神分析黒書(*Le Livre noir de la psychanalyse*)』⁽²⁵⁾として、精神分析への明確な攻撃へと結実する。このような危機の只中に、ラカンと宗教に関する研究が集中していることは検討に値するだろう。

実は、精神分析の純粋性を主張する際に宗教的なメタファーを使用したのはラカン自身であった。例えば1973年のテレビ放送にて「心理学者、精神療法家、精神科医など、精神衛生に従事しているすべての者たちは、まさに底辺で、辛抱強く、世界の悲惨のすべてを引き受けています。その一方で、分析家は？」と問われたラカンは、「精神分析家を客観的に位置付けるには、昔、聖人である、と呼ばれたあり方を以てするのが最適でしょう。」と答えている⁽²⁶⁾。以降も引き続き展開されることになる「聖人」という主題を提起する時にラカンの念頭にあったのは、無論キリスト教の神秘家たちであろう。

上尾真道は、聖人という主題が練り上げられたのが〈68年5月〉の精神医療改革、加えて反精神医学をめぐる論争という巨大なうねりの中においてであったことを指摘している⁽²⁷⁾。この時、2000年代後半の宗教への注目は、どこかラカンの問題意識を反復しているように思われる。すなわち、精神医療全体におけるラカン派の存在意義という観点から見たときに、精神分析と宗教という巨大な問いが前景化しているのである。従来の宗教心理学的な研究において、独自の歩みをたどったラカン派が対象とされる機会は他の分析家に比べて少ない。しかし、ラカンが精神分析の純粋性を主張したこと、まさにそこで神秘主義、宗教が参照されているということから、思想運動としての精神分析の歴史的布置を検討する必要性が明確化していると考えられる。

第3章 ラカンと神秘主義

3-1. 20世紀前半フランスの神秘主義研究

宗教史家ジャック・ル・ブランは、ラカンが活躍した戦間期から戦後にかけてのフランスにおいて、第1章で確認したような精神病理学的な伝統とまったく異なった神秘主義研究が花開いたことを指摘する⁽²⁸⁾。彼がラカンに直接的な影響を与えたものとして挙げるのは、科学史家として知られラカンの主著『エクリ』にも登場するアレクサンドル・コイレのヤコブ・ベーム研究⁽²⁹⁾と、ジャン・バリュジの十字架のヨハネ研究⁽³⁰⁾だが、より重要と思われるのは後者である。というのも、彼はラカンの高等学校時代の哲学教師を務めており、直接的な言及こそないものの彼に大きな感銘を与えたとされているからだ⁽³¹⁾。

平賀裕貴の論考によれば⁽³²⁾、バリュジの研究はそれまでウィリアム・ジェイムズやアンリ・ドラクロワといった心理学者たちによって探求されていた神秘主義を、言語表現に焦点を当てることで、哲学の対象とするものであった。1954年の宗教心理学会議におけるラカンの発表「象徴、およびその宗教的な機能について」⁽³³⁾は、当時の精神分析理論を適用しながら十字架のヨハネの詩における象徴の機能を分析するものであり、ル・ブランはこれを言語に注目したバリュジの仕事の系譜に位置付けている。

また同時期に行われたセミナー3『精神病』においても、十字架のヨハネはその卓越した言語表現においてシュレーバーのような精神病患者と区別される「偉大な神秘家」として参照されており⁽³⁴⁾、ラカンが早くから神秘主義に関心を抱いていたことがわかる。この点についてもう一人重要と思われるのは、同じく十字架のヨハネに注目していたジョルジュ・バタイユである。個人的な友人でもあったバタイユとラカンのあいだの思想的な共鳴については、多くの先行研究が存在する⁽³⁵⁾。しかし、〈68年5月〉を経て精神分析を再定義する過程でラカンはバタイユ的な思考から離れたという指摘もあり⁽³⁶⁾、神秘主義をめぐるふたりの共通点と相違点は今後検討されるべき課題といえる。

3-2. セミナー20『アンコール』における神秘主義

ラカンによる神秘主義への言及としてもっとも重要なのは、セミナー20『アンコール』における議論である。ここではラカンの理論について詳細に踏み込むことは避けて要諦のみを記すことで、これについての先行研究を見る前提を共有したい⁽³⁷⁾。

ラカンは『アンコール』の中で、かねてから取り組んでいた男女のセクシャリティという問題を、四つの論理式から構成される「性別化の式」という形で定式化する⁽³⁸⁾。神秘主義は、そこで女性の式の側に位置付けられるものとして以下のように参照される。

神秘主義は政治的ではないもののすべてではありません。それは真摯なものであり、私たちは何人かの人物からこれについての情報を得ることができます。ほとんどは女性ですが、十字架のヨハネのような才能に恵まれた人たちもそうです。というのも、男性でも、 $\forall x \Phi x$ [男性側の式]の側に身を置くことを強いらられるわけではありませんから。人は、「すべてではない」[女性側の式]の側に自らを位置付けることもできるのです。⁽³⁹⁾ (角括弧内は筆者による補註)

ここでラカンが述べているように、性別化の式において男女は生物学的な差異によって規定されるわけではない。「すべてではない」側にいるものが、その限りにおいて女性とされるのである。対して、全称記号 \forall が示すように、男性は「すべて」の側に位置するものとして定義される。そして、十字架のヨハネのような神秘家は、たとえ男性であっても女性の式の側にいると述べるのである。

もう少し議論の理路をたどっておこう。ラカンは記号論理学を援用しながら、男性側の「すべて」を成り立たせるためには例外者の想定が必要であり、その例外者とは「絶対的な享樂」⁽⁴⁰⁾を得る者だと述べる。よって、男性はどこかに他にいる例外者のみが享受する絶対的な享樂から去勢された、不十分な享樂しか得ることができない。

これに対して、「すべてではない」側、自ら例外の位置を選択する女性には、男性には不可能な「〈他〉の享樂」が可能となる。この享樂を表現した具体例としてラカンは、アピラのテレサの神秘体験を題材としたベルニーニの作品「聖テレジアの法悦」を挙げる。

ローマに行ってベルニーニの彫刻を見るだけで、すぐに彼女が享樂していることがわかるでしょう。それは疑いありません。では、彼女は何を享樂しているのでしょうか。確かなのは、神秘家たちの本質的な証言とはまさに、体験しているがそれについて何も知らないと言っているということです。⁽⁴¹⁾

要約するならば、ラカンは男性の享樂とは本質的に異なる女性の享樂を神秘主義のうちに見出し、さらに女性はそれについて何も知らないという仕方ではしか語りすることができないと述べているのである。ラカンのこのような洞察に含まれている論点について、次章では「言語」「性的差異」「身体」の三つに整理しながら、それぞれ先行研究を概観しよう。

第4章 諸問題

4-1. 言語

まず取り上げるのは、神秘主義の言語という問題である。先にも述べたように、従来の神秘主義をめぐる議論においては体験の方に重心が置かれ、加えてその体験は言語化できない直接的なもの、内面的なものとされることが常であった。

渡辺優は、こうした「体験/言語」の二分法に潜む陥穽に対して、次の二点から批判を行っている⁽⁴²⁾。第一に、フロイトの「事後性」概念が示すように、体験の意味はその後の時間の流れの中で変化するため、それを語る言語自体が体験を構成する一部をなすという点。第二に、語りえぬものを「それでも語った」神秘家の言葉は、パフォーマンス的な次元で体験の不可言性を揺るがし、体験の解釈を無限に開いたままにするという点だ。

この時、前章で確認したように、ラカンが一貫して神秘主義の言語を議論の対象としたことはより一層興味深くみえてくる。言語という観点から、ラカンの議論を批判的に検討したものに、佐々木中の研究⁽⁴³⁾がある。佐々木は神秘主義がきわめて言語的な実践であるという前提に立った上で、ラカンは神秘主義に注目することで自らの言語観を大きく更新して

いったと議論を展開する。

「無意識は言語のように構造化されている」という名高い定式が示すように、1950年代のラカンは構造主義言語学を参照しながら、フロイトの無意識を換喩と隠喩によって織り成されるシニフィアンの構造として翻訳した⁽⁴⁴⁾。佐々木は、こうしたシニフィアンの差異からなる純粋な形式としての言語に対して、『アンコール』において神秘主義のうちに見出されるのが、音韻や音調に重きを置いた、より身体的な言語「ララング」であることを指摘し、さらにその「ララング」概念を神秘家の文体になぞらえながら変奏してみせる⁽⁴⁵⁾。

ラカンの言語観の変化をシニフィアンからララングへと跡づけ、それを神秘主義に接続する佐々木の議論は大変に興味深い。ラカンはその後のセミナー 23『サントーム』⁽⁴⁶⁾にて、言語表現の可能性を追求した作家ジェイムズ・ジョイスの特異なエクリチュールを分析しながら、症状や昇華といった概念の再定義を試みることになる⁽⁴⁷⁾。『アンコール』における神秘主義の議論がその言語観の変化の契機であるのかについてのより具体的な論証がさらなる課題となるだろう。

4-2. 性的差異

続いて重要なのは、性的差異の問題である。ジェンダー・セクシャリティの視点が今日の人文社会学にとって不可避であることは言うまでもないだろう。「女性」と神秘主義をめぐるラカンの議論の現代的な有効性はどれほどであろうか。

精神分析における女性論を臨床と理論の両面から検討した重要なものに、論集『精神分析にとって女とは何か』⁽⁴⁸⁾がある。その中で精神分析とフェミニズムの歴史を網羅的に整理した北村婦美は、ラカンの影響が大きかったフランスでは英米圏とは異なった女性論が展開されたことを指摘している⁽⁴⁹⁾。実際に、フランスの女性解放運動 MLF の内部には、精神分析理論から女性特有の欲動のあり方を探求する〈精神分析と政治〉グループが存在した。このグループの精神分析史上の位置づけについては、佐藤朋子による論考に詳しい⁽⁵⁰⁾。

一方、同じ論集の中で松本卓也は、ラカンの女性論がフランスのフェミニズムによって十分に理解されてきたわけではないことを指摘している⁽⁵¹⁾。例えばリュース・イリガライは、ラカンが女性の享楽について述べるときに「聖テレジアの法悦」を挙げることを批判して、その議論が結局は女性をどこか彼岸に位置づける男性中心主義なものであるとして退ける⁽⁵²⁾。しかし、松本によればイリガライのこうした評価はラカンの「男性側の式」にとどまるものであり、その女性論の真意を捉えきれていない。二つの性のあいだの差異を実定化するのではなく、その対立自体が解消していく「すべてではない」側を提示するラカンの議論は、現代フェミニズム理論に照らしても一定の意義があるといえるだろう⁽⁵³⁾。

近年では、女性的なものとしての神秘主義についての研究も数多く見られる。エイミー・ハリウッドの研究⁽⁵⁴⁾はバタイユ、ボーヴォワール、ラカン、イリガライの議論を参照しながら、フランス現代思想において神秘主義が孕んでいる女性性が果たした役割を明らかにしている点で重要である。また、立木康介は、ラカンの女性論を 50 年代から『アンコール』に至るまで丁寧⁽⁵⁵⁾に追いかけた上で、彼と親交があった、あるいは彼が頻繁に参照した女性たちについて興味深い各論を展開している⁽⁵⁵⁾。その中で立木も紹介している分析家カトリーヌ・ミーヨは、ラカンに依拠するかたちで女性と神秘主義について論じた多くの研究⁽⁵⁶⁾を

発表しており、今後検討すべき重要なものと思われる。

4-3. 身体

最後に取り上げるのは、身体の問題である。とはいえこの語は本質的に一義的な定義が不可能であり、重層的なニュアンスを帯びている。ここでは、ラカン享楽概念に関する一側面に限って、先行研究を紹介したい。

まず鶴岡賀雄は、神秘主義における身体が、神秘体験が起こる場として他人に見られるものという性格を強く帯びていたことを指摘している⁽⁵⁷⁾。神秘体験は、体験する本人にとっての内的な出来事であるばかりでなく、その身体にさまざまな仕方でも外的に表出する。鶴岡によれば、皆の目に見えるかたちで現れる身体的な異象は、神秘体験が神の恩寵によるものか、悪魔の憑依によるものか、はたまた自然現象によるものなのかを診断するための記号としての役割を果たしていた。

先に述べた精神病理学的な見方は、記号に読み取る意味を宗教的なものから医学的なものに置き換えることで、身体の外から解釈されるという性格を一層強調していった。これを顕著に表すものに、シャルコーらが刊行した『サルペトリエール写真図像集』がある⁽⁵⁸⁾。この図像集では、ある意味でスペクタクル性の高いヒステリー患者の身体的な症状がカタログのように陳列された。そこで細く観察される腕の微妙なねじれや眼球運動が、ヒステリーの段階を診断するための材料とされたのである。

ここで重要なのが、ラカンが神秘主義に見出していた享楽という概念が、身体の記号としてのあり方を批判するものとして提起されたということだ。上尾真道は「医学における精神分析の座」と題されたラカンの発表⁽⁵⁹⁾を読み解くことで、この点を鮮明に示している⁽⁶⁰⁾。その指摘によれば、医学は身体を計測して数値化することで、享楽の次元を決定的に見落としているというのがラカンの主張である。これはまさに、外的に解釈される身体に対する、内的に実感される身体の復権として解釈できる⁽⁶¹⁾。精神分析が探求する享楽する身体と神秘主義の身体を比較することで、興味深い議論が導けるのではないだろうか⁽⁶²⁾。

おわりに

ここまで、ラカン派に焦点を当てて精神分析と神秘主義をめぐる先行研究を紹介しながら、ふたつの領野を並べることで拓ける可能性について概観してきた。最後に今後の展望について簡潔に述べて、本稿を締め括りたい。

ラカンと神秘主義という主題は、近年徐々に関心を集めつつある。2021年には「ラカンと神秘家たち」と題されたシンポジウムがフランスで二日間にわたって開催され、その成果は書籍としてまとめられる予定のようだ⁽⁶³⁾。現代ラカン派の重心は『アンコール』に始まる70年代の理論に置かれており、その理論的な刷新が神秘主義の研究にどう反映されているかを知る貴重な研究として期待される。

一方でこの主題は、ラカンの理論を神秘主義という事象にただ適用したものになりやすいという点には気を付けなければならないだろう。必要なのは神秘主義との関係から精神分析の方をこそ捉え直すことであり、その際に本稿で提示した歴史的な視座、および「言語」

「性的差異」「身体」といった論点は重要な手がかりとなるはずである。

註

- (1) 以下を参照。鶴岡賀雄「「神秘主義の本質」への問いに向けて」『東京大学宗教学年報』第18号, 2001年, 1-14頁。渡辺優『ジャン＝ジョゼフ・スュラン——17世紀フランス神秘主義の光芒』慶応大学出版会, 2016年, 序章。
- (2) 深澤英隆『啓蒙と霊性——近代宗教言説の生成と変容』岩波書店, 2006年, 16-20頁, 第5章。
- (3) 鶴岡賀雄「「神秘主義」概念の歴史と現状」『東京大学宗教学年報』第34号, 2017年, 1-24頁。
- (4) 渡辺優「もうひとつのエクスタシー——「神秘主義」再考のために」『ロザリウム・ミュスティクム——女性神秘思想研究』第1号, 2013年, 63-81頁。
- (5) シャルコーの業績の全体については以下を参照。江口重幸『シャルコー——力動精神医学と神経病学の歴史を遡る』勉誠出版, 2007年。
- (6) 田中浩喜「デジレ＝マグロワール・ブルヌヴィルと宗教——病院のライシテ化と宗教病理学」『東京大学宗教学年報』第36号, 2019年, 53-72頁。
- (7) Henri-Frédéric Ellenberger, *The Discovery of the Unconscious : the History and Evolution of Dynamic Psychiatry*, New York: Basic Books, 1970. アンリ・エレンベルガー『無意識の発見——力動精神医学発達史(上・下)』木村敏・中井久夫訳, 弘文堂, 1980年。
- (8) Jacques Lacan, *Le Séminaire Livre XX (1972-1973), Encore*, texte établi par Jacques-Alain Miller, Paris: Seuil, 1975, p. 71. ジャック・ラカン『アンコール』藤田博史・片山文保訳, 講談社, 2019年, 137頁。(以下, 略号 *S. XX*)
- (9) *Ibid.*, p.70. 同書, 135頁。
- (10) セルトーの神秘主義研究についての優れた論考として, 鶴岡賀雄「現前と不在——ミシェル・ド・セルトーの神秘主義研究」『宗教哲学研究』第19号, 2002年, 13-28頁を参照。
- (11) 佐々木中「宗教の享楽とは何か——ラカンによる享楽の「類型学」から」『宗教研究』第352号, 2007年, 47-68頁。
- (12) Michel de Certeau, *La Fable mystique : XVI^e-XVII^e siècle*, t. 1, Paris: Gallimard, 1982.
- (13) *Ibid.*, p. 17.
- (14) 同じくこのような観点からの論考として, 例えば以下を参照。Jacques Le Brun, « Psychanalyse et mystique, quelques questions », dans *Champ lacanien*, n° 8, 2010, pp. 127-147. « Mystique et psychanalyse », dans *Figure de la psychanalyse*, n°34, 2017, pp. 71-82.
- (15) 松本卓也「ジャック・ラカン生誕120周年によせて」『人文会ニュース』第138号, 2021年, 2-17頁。この小稿にはラカンに関する邦語, 邦訳文献の網羅的なブックガ

イドが付されている。

- (16) ミレールの経歴や理論的な展開については、以下に詳しい。Nicolas Floury, *Le réel insensé : Introduction à la pensée de Jacques-Alain Miller*, Paris: Germania, 2010. ニコラ・フルリー『現実界に向かって——ジャック＝アラン・ミレール入門』松本卓也訳, 人文書院, 2020年。
- (17) 立木康介『露出せよ, と現代文明は言う——「心の闇」の喪失と精神分析』河出書房新社, 2013年, 205頁を参照。
- (18) 一部例を挙げるならば, 雑誌『nyx』, 創刊号, 2015年, 特集「現代ラカン派の理論展開」。松本卓也『享楽社会論——現代ラカン派の展開』人文書院, 2018年。
- (19) 例えば, 以下を参照。Slavoj Žižek, *Less than Nothing: Hegel and the Shadow of Dialectical Materialism*, London: Verso, 2012. Eve Miller-Rose et Daniel Roy, « Entretien nocturne avec Jacques-Alain Miller », dans *Lacan Quotidien*, n° 698, 2017, pp. 14–23.
- (20) Jacques Lacan et Jacques-Alain Miller, *La Troisième, Théorie de la langue*, Paris: Navarin Editeur, 2021. Jacques Lacan, *Aux confins du Séminaire*, texte établi par Jacques-Alain Miller, Paris: Navarin Editeur, 2021.
- (21) Anaëlle Lebovits-quenehen éd. *Pourquoi Lacan*, Paris: Press Psychanalytiques de Paris, 2021.
- (22) 以下, 管見の限りで例を挙げるならば Jacques Lacan, *Le triomphe de la religion précédé de discours aux catholiques*, Paris: Seuil, 2005. Pierre Daviot, *Jacques Lacan et le sentiment religieux*, Paris: Érès, 2006. Jean Allouch, *La psychanalyse est-elle un exercice spirituel? Réponse à Michael Foucault*, Paris: EPEL, 2007. Philippe Julien, *La psychanalyse et le religieux : Freud, Jung, Lacan*, Paris: Cerf, 2008. 雑誌 *Champ lacanien*, n° 8, 2010.
- (23) この点については, フランス文学研究者である石原陽一郎氏による以下の記事から着想を得た。「精神分析とスピリチュアルなもの」, 2011/9/11, <https://criticon.hatenadiary.org/entry/20110911/1315739550> (最終閲覧 2022/4/18)
- (24) 立木康介『露出せよ, と現代文明は言う』, 第8章を参照。
- (25) Catherine Meyer éd. *Le Livre noir de la psychanalyse*, Paris: Les Arènes, 2005. これに対して, 精神分析側は直ちに以下の反論を提出している。Jacques-Alain Miller éd. *L'anti-livre noir de la psychanalyse*, Paris: Seuil, 2006.
- (26) Jacques Lacan, « Télévision » dans *Autre Écrits*, Paris: Seuil, 2001, p. 515–519. ジャック・ラカン『テレヴィジョン』藤田博史・片山文保訳, 講談社学術文庫, 2016年, 32–37頁。
- (27) 以下を参照。上尾真道『ラカン 真理のパトス——1960年代フランス現代思想と精神分析』人文書院, 2017年, 第1章, 第5章。「〈68年5月〉と精神医療改革のうねり」王寺賢太・立木康介編『〈68年5月〉と私たち——「現代思想と政治」の系譜学』, 読書人, 2019年, 121–142頁。
- (28) Jacques Le Brun, « Psychanalyse et mystique, quelques questions ».

- (29) Alexandre Koyré, *La philosophie de Jacob Boehme, 3ème éd*, Paris: Vrin, [1929] 1979.
- (30) Jean Baruzi, *Saint Jean de Croix et le problème de l'expérience mystique, 2ème éd*, Paris: Alcan, [1924] 1931.
- (31) Élisabeth Roudinesco, *Jacque Lacan Esquisse d'une vie, histoire d'un système de pensée*, Paris: Fayard, 1993, pp. 30–31. エリザベス・ルディネスコ『ジャック・ラカン伝』藤野邦夫訳, 河出書房新社, 2001年, 26–27頁。
- (32) 平賀裕貴「20世紀前半期フランスにおける神秘主義研究の諸相」『立教大学フランス文学』第47号, 2018年, 93–117頁。
- (33) Jacques Lacan, « Du symbole, et sa fonction religieuse », dans *Le mythe individuel du névrosé, ou, poésie et vérité dans la névrosé*, Paris: Seuil, 2007, pp. 53–98.
- (34) Jacques Lacan, *Le Séminaire Livre III (1955–1956), Les Psychoses*, texte établi par Jacques-Alain Miller, Paris: Seuil, 1981, pp. 90–91. ジャック・ラカン『精神病(上)』小出浩之・鈴木國文・川津芳照・笠原嘉訳, 岩波書店, 1987年, 127頁。
- (35) 例えば, 以下を参照。Jacques-Alain Miller, *Un effort de poésie, Cours du 2002–2003, leçons des 14 et 21 mai 2003*, (inédits). ミレールによるセミネールは未刊行であるが, その殆どがオンライン上で公開されている。
- (36) Paul Verhaeghe, “Enjoyment and Impossibility: Lacan’s Revision of the Oedipus Complex” in Justin Clemens and Gregg Russell ed., *Jacques Lacan And the Other Side of Psychoanalysis: Reflections on Seminar XVII*, Durham: Duke University Press, 2006, pp. 29–49.
- (37) 『アンコール』の議論の全体を概説するものとしては, 佐々木孝次・林行秀・荒谷大輔・小長野航太『ラカン『アンコール』解説』せりか書房, 2013年を参照。
- (38) *S. XX*, p. 73. 邦訳 139頁。この式の読み方については, すでに多くの解説が存在する。例えば, 松本卓也『人はみな妄想する——ジャック・ラカンと鑑別診断の思想』青土社, 2015年, 第7章3節を参照。
- (39) *Ibid*, p. 70. 邦訳 135頁。
- (40) 本稿では十分な議論する用意がないものの, ラカンの理論において「享楽」は「快樂」とは区別される独特な概念であることには注意が必要である。享楽概念の年代ごとの変遷については, 以下に詳しい。Jacques-Alain Miller, « Les six paradigmes de la jouissance », dans *La Cause Freudienne*, n° 43, 1999, pp. 7–29.
- (41) *S. XX*, pp. 70–71. 邦訳 136頁。
- (42) 渡辺優『ジャン＝ジョゼフ・スュラン』, 48–51頁。
- (43) 佐々木中『夜戦と永遠(上)』河出文庫, 2011年, 第1部第4章。
- (44) 具体的には, 以下を参照。工藤頭太『精神分析の再発明——フロイトの神話, ラカンの闘争』岩波書店, 2021年, 第1章。
- (45) 佐々木中『夜戦と永遠(上)』, 221–224頁。
- (46) Jacques Lacan, *Le Séminaire Livre XXIII (1975–1976), Le sinthome*, texte établi par Jacques-Alain Miller, Paris: Seuil, 2005.

- (47) 『サントーム』におけるジョイス論を考察したものとしては、上尾真道「サントームについて——ラカンとジョイスの出会いは何をもたらしたか」『季刊 iichiko』第 40 号, 2018 年, 18–36 頁を参照。
- (48) 西見奈子編『精神分析にとって女とは何か』福村出版, 2020 年。
- (49) 北村婦美「精神分析とフェミニズム——その対立と融合の歴史」『精神分析にとって女とは何か』, 1–60 頁。
- (50) 佐藤朋子「〈精神分析と政治〉によるポスト 68 年 5 月」『I.R.S.——ジャック・ラカン研究』第 18 号, 2019 年, 26–47 頁。
- (51) 松本卓也「ラカン派の女性論」『精神分析にとって女とは何か』, 180–196 頁。
- (52) Luce Irigaray, *Ce sexe qui n'en est pas un*, Paris: Éditions de Minuit, 1977, p. 89. リュース・イリガライ『ひとつではない女の性』棚沢尚子・中嶋公子・小野ゆり子訳, 勁草書房, 1987 年, 112 頁。
- (53) ラカンの女性論の政治的な意義についての論考として、上尾真道「「すべてではない」地平における政治的審級について——ラカンの「女の享楽」概念の展開」『思想』第 1113 号, 2018 年, 36–58 頁を参照。
- (54) Amy Hollywood, *Sensible Ecstasy Mysticism, Sexual Difference and the Demands of History*, Chicago: University of Chicago Press, 2002.
- (55) 立木康介『女は不死である——ラカンと女たちの反哲学』河出書房新社, 2020 年。
- (56) 例として、以下を参照。Catherine Millot, *Abîmes ordinaires*, Paris: Gallimard, 2001. *La vie parfaite*, Paris: Gallimard, 2006. *O Solitude*, Gallimard, 2013.
- (57) 鶴岡賀雄「西欧キリスト教史における「行と身体」の諸相」『宗教研究』第 355 号, 2008 年, 65–85 頁。
- (58) Georges Didi-Huberman, *Invention de l'hystérie: Charcot et l'iconographie photographique de la Salpêtrière*, Paris: Macula, 1982. ジョルジュ・ディデイ＝ユベルマン『ヒステリーの発明——シャルコーとサルペトリエール写真図像集(上・下)』谷川多佳子・和田ゆりえ訳, みすず書房, 2014 年を参照。
- (59) Jacques Lacan, « La place de psychanalyse dans la médecine », dans Jenny Aubrey, *Psychanalyse des enfants séparés*, Paris: Flammarion, 2010, Ch. 13.
- (60) 上尾真道『ラカン 真理のパトス』, 第 5 章第 1 節。
- (61) 実際に現代ラカン派は近年, 女性の享楽について男性の享楽の対比よりも, 身体という次元から捉え直そうとする傾向にある。以下を参照, Jacques-Alain Miller, *L'être et L'Un, Cours du 2010–2011, leçons des 2 mars 2011*, (inédits). « L'inconscient et le corps parlant », dans *La Cause du Désir*, n°88, 2014, pp. 104–114. ジャック＝アラン・ミレール「無意識と語る身体」山崎雅広・松山航平訳, 『表象』第 11 号, 2017 年, 81–97 頁。
- (62) ラカンとセルトーの議論を参照しながら, 神秘主義の身体について論じたものとしては以下のものがある。Jean-Daniel Causse, « Le corps et l'expérience mystique. Analyse à la lumière de Jacques Lacan et Michel de Certeau », dans *Cahiers d'études du religieux: Recherches interdisciplinaires*, n° 13, édités par le laboratoire

CRISES de l'Université Paul-Valéry Montpellier 3, 2014.

- (63) Céline Guilleux, 'La psychanalyse lacanienne et les mystiques', 2021/11/22, [ht
tps://calenda.org/939070](https://calenda.org/939070)を参照。(最終閲覧 2022 年 2 月 22 日)